六歌仙の1人

在原業平の生きざま 新作舞踊で演じます

芦屋の小槌伝説絡め

きょうルナホールで 地元在住の劇作家ら

恋と歌に生きた在原業平の生きざまを、地名とともに芦屋に残る打ち出の小槌（づち）伝説を絡めて描いた新作舞踊「小槌業平」が二十七日、業平ゆかりの地、同市業平町のルナホールで初演される。作品を手掛けたのも芦屋在住の女性の劇作家と邦楽演奏家で、新たな業平像を追求した邦楽版〝芦屋ブランド〟として話題を呼びそうだ。

「小槌業平」は、西宮市在住の評論家、河内厚郎さんが芦屋女性の感性でとらえた業平の魅力をアピールしようと企画。歌舞伎や日本舞踊などの分野で活躍中の芦川照葉さん（三）＝同市東芦屋町＝の脚本に、清元延柳さん＝同市高浜町＝が曲を付け、波や御殿をイメージさせる音色や独特の節回しで業平の心を表現した。

立方（たちかた）として踊りを振り付け、演じるのは、関西の若手日本舞踊家の花柳寛十郎さんで、この三人は以前、新作舞踊を国立文楽劇場で演じたことが縁で今回も協力することになった。

ストーリーは、清和帝に嫁ぐことが決まった藤原高子（たかいこ）と恋の逃避行に出たものの、追手に仲をさかれた業平が芦屋の別荘で傷心の日々を過ごしているうち、打ち出の小槌を拾う設定。昔をしのび、高子の舞姿に身を変ずるが、夕暮れの鐘の音に夢から覚めて寂しさに一人立ち尽くす、という内容。

芦川さんは「今後も芦屋に題材を求めたオリジナルの舞踊を作りたい。この作品は芦屋発第一号だけに反響が楽しみです」と話している。

「小槌業平」は、二十七日午後開かれる「清元演奏会」の最後の演目で、上演は午後六時ごろの予定。入場料は三千円。問い合わせ先は清元延柳会（0798・67・2661）。

新作舞踊「小槌業平」を手がけた芦川照葉さん、清元延柳さん、花柳寛十郎さん（左から）＝芦屋市内で

【在原業平】平安初期の歌人。情熱的な歌風で、六歌仙の一人。阿保親王の第五子。「伊勢物語」の主人公とされる。美女の小野小町に対比される伝説的な色好みの美男で、後世の歌舞伎や浄瑠璃の題材にもなっている。芦屋市内には、業平の歌碑や、阿保親王をまつる「親王塚」があり、ルナホールの場所は業平の別荘があった場所と伝わる。